

変化する 家族と 住まい —— 近居

親世帯と子世帯などが、つかず離れずの
距離を保ちながら住まう「近居」が、

近年、注目を集めている。

変わり続ける社会と家族のありようを映し、
住まい手が編み出した工夫の産物、近居には、

暮らし心地のヒントが

隠されているのではないだろうか。

古今の集合住宅を研究し、建築計画や住宅政策にも

携わる大月敏雄さんに訊いた。

構成／鈴木伸子

古くて新しい、 近居という現象

近居とは、1970年代くらいから
建築学や住居学などの分野で使われて
いた言葉です。とりわけ1973年は、
認知症の老人の問題を描いた小説『恍

惚の人』がベストセラーとなって映画
化されたり、老人福祉法が改正され70
歳以上の老人医療が無料で行われるよ
うになったりしたこと、後に日本の
福祉元年といわれるようになった象徴
的な年です。この頃は、石油ショック
とともに日本の高度経済成長が停滞し、
学生運動が終焉してシラケ世代といわ

查してきました。そういうところで聴
き取りをすると、家族のうち誰かしら
が近所の別室に住んでいるというケー
スが数多く見受けられました。例えば、
家が狭くて兄妹も多いところでは勉強
ができないからと、受験生のお兄ちゃ

んが近所にアパートを借り、食事のと
きだけ家に帰ってくる、とかしている
んですね。
私の研究対象は、住宅の設計や計画
です。人が毎日の生活を居心地よく送
るために、集合住宅や家の中をどう計

画したらよいかを日々考えてきました。
しかし、住まい手の方はそれよりも相
当したたかたか、予定外に家族が増え
たり子どもが成長したりして部屋が足り
なくなったら、まるで飛び道具を使う
ように、家の外にアパートを借りて柔

発想は 住まい手から

大学生の頃から、関東大震災の震災
復興で建てられた同潤会アパートや、
東京の下町での人びとの住まい方を調

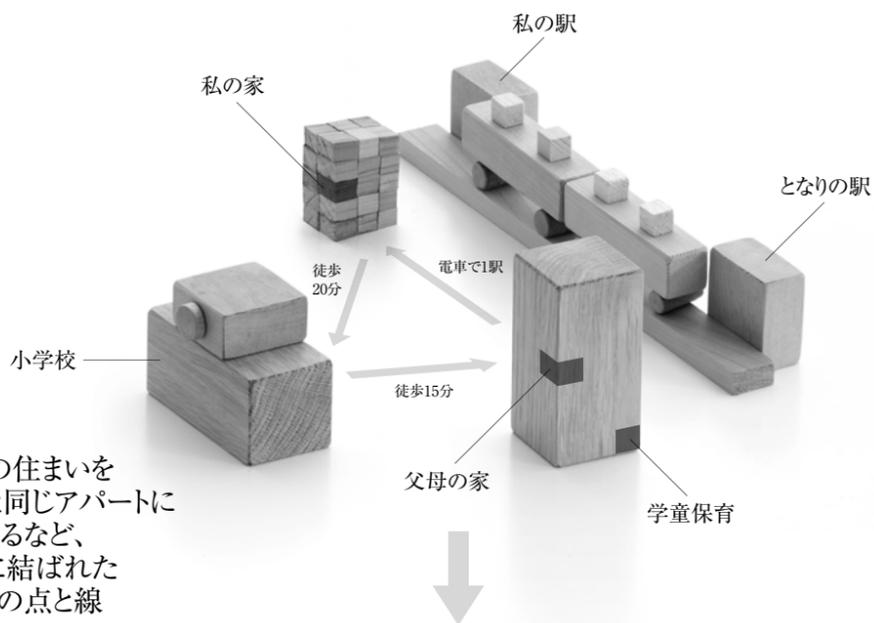
れる若者が登場、また統計上は家の数
が世帯の数を上回り「これからの住宅
は量より質」と言われ始めた時期とも
重なります。
このような時代背景のなか、社会的
には「独居老人」が問題になりましたが、
独居と定義される老人たちによくよく
話を聞いてみると、実は子どもが近所
に住んでいて、つかず離れず面倒を見
ている例があった。いわば「家族資源」
を持つ人が互いに近くに住み、子育て
や介護などを助け合う近居が、無意識
的に行われていた状況があることがわ
かったのです。

バブルが終焉し低成長時代が続く2
000年代以降、近居はさらに増えて
おり、近年改めて注目される概念とな
っています。給料が安いために夫婦は
共に働かざるを得ず、そこに子どもが
生まれたら、働きながらどうやって育
てるかという問題にぶち当たる。保育
所にもなかなか入れない。そういう夫
婦がいわば自己防衛策として自分たち
の親と近くに住み、子育てを手伝って
もらうケースが昨今の近居の典型例で
す。

図1／近居の実例

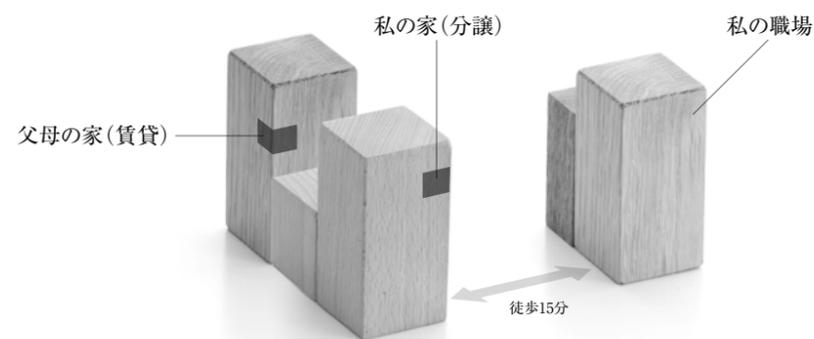
話をうかがった
大月敏雄氏自らが実践した
ふたつの近居例。

その1 子どもが小学生のとき



両親の住まいを
学童保育と同じアパートに
借りるなど、
柔軟に結ばれた
近居の点と線

その2 両世帯で移り住み

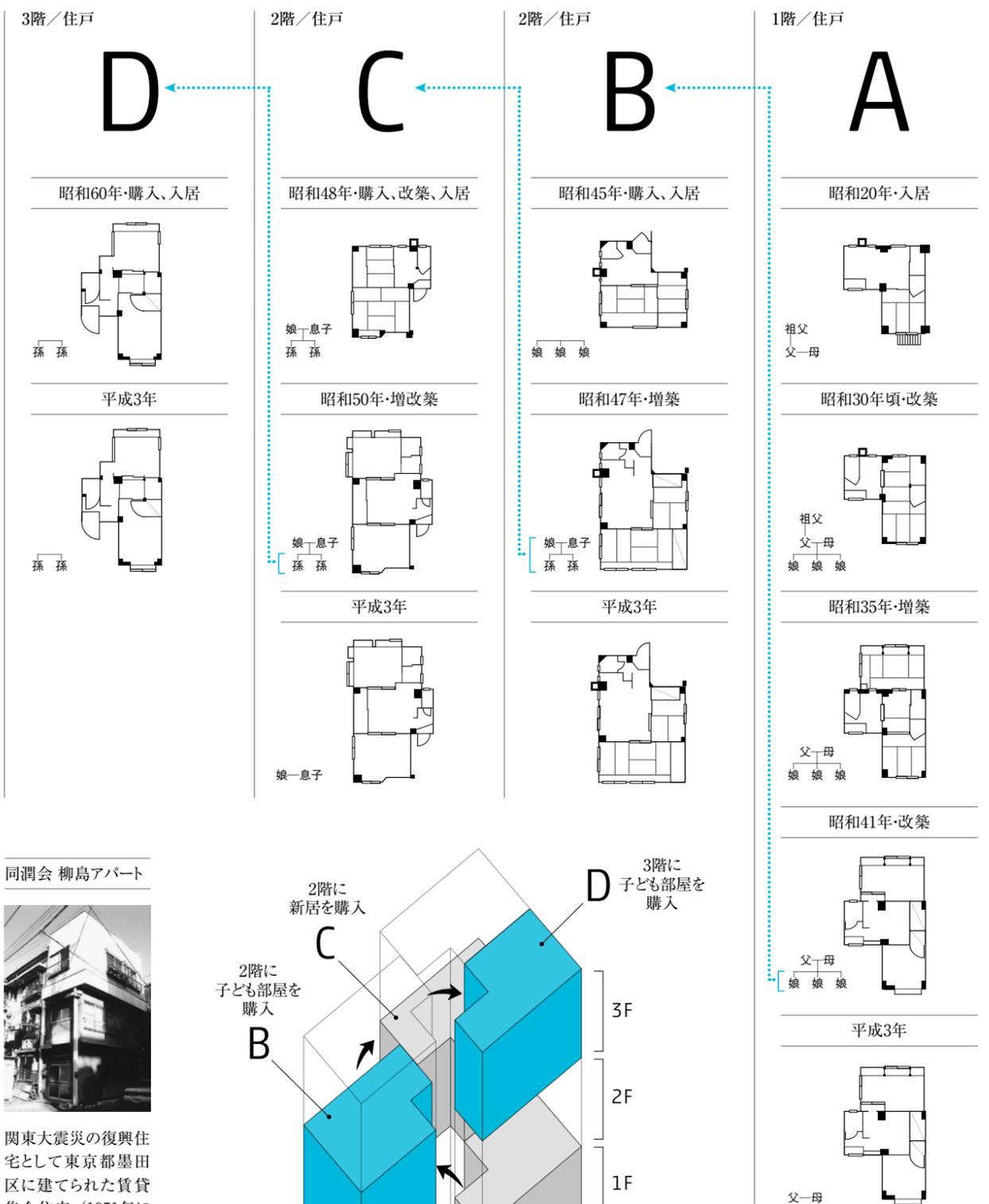


子どもが高校生になった
タイミングで
職場の近くに引っ越し。
両親も同じ
マンションに住む

Profile

おおつきとしお／東京
大学大学院工学系研究
科教授。1967年、福岡
県生まれ。東京大学工
学部卒業。博士(工学)。専
門は建築計画・住宅地計
画。主著に『集合住宅の
時間』(王国社)、『近居
—— 少子高齢社会の住
まい地域再生にどう活
かすか』(編著・共著、学
芸出版社)などがある。

図2／複数住戸を使った、柳島アパートの近居例

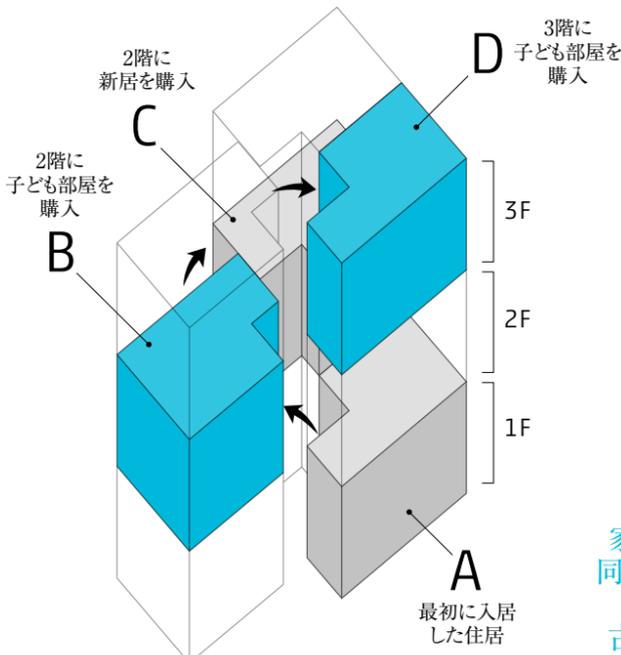


出典／大月敏雄「集合住宅における住環境形成過程」日本建築学会編「人間・環境系のデザイン」(彰国社、1997年)をもとに作成

同潤会 柳島アパート



関東大震災の復興住宅として東京都墨田区に建てられた賃貸集合住宅(1951年に分譲)。1995年に解体されるまで、旺盛な増改築が繰り返された。



家族構成が変わるたび
同じ集合住宅内に住居を
買い足し、増殖する。
古くて新しい近居の姿。

町ごと全部 住みこなす

英語で、居住することをhabit, habitationなどといいます。この言葉には「習慣」という意味がある一方で、「居ついて巣をつくり、そこで栄える」といった語感もあります。種を蒔いて何年か経ってみたら、その場所に植物が増えていた、というイメージでしょうか。人が一つ所に住みつくということは、そういう生態的な現象でもある。言い換えれば、人は自分の周りの環境を都合のいいように、合理的に変化させながら生きている生物なのだ、ともいえるのです。

人はある町に移り住むと、その町を住みやすいように開拓します。行きつけのスーパーや居酒屋を探し、頼りになるご近所さんや子どものお友達をつくる。そんな風に知らないうちに周りの環境を耕しながら、意味づけをしなが、居心地のよさを感じていくようになっていく。

長年人びとの住まい方を調査していると、同じ地域内で何度も引っ越しして、住宅すごろくみたいなことをやっている

家族の常識を 取り払った これからの近居

近居というのは、家族資源を使える人が、ある特定の条件を満たせばできる問題解決方法です。では、資源を持つていない人はどうしたらよいかというと、お隣さんや友人という「拡大家族」と近居するという方法があります。東京の団地で、別棟に住んでいるが非常に仲がよく、常に行ったり来たりしているひとり暮らしの女性同士というのが結構います。近くの他人をいかに頼れるか。そういう人間関係は実はとても重要で、そういう人同士で近くに住まうことも近居の延長上に捉えら

れると思います。

東日本大震災で被災した岩手県の町で仮設住宅に住んでいる人たちにアンケートをして、災害公営住宅に入れるようになったら誰と住みたいかと尋ねたときも、家族が22%、仲のいいご近所さんが23%、という結果が出ました。被災して家を失い仮設住宅で知り合った同士が、苦しい状況を共有しながら、ゆえにもものすごく仲良くなれたのに、災害公営住宅に入るときにまたばらばらにされてしまう。それをなんとかしようと、友達と一緒に入居を申し込むと抽選で有利になる、という制度を、その町では導入しました。たとえ血が繋がってなくても、住み心地のよい環境をつくるためには絶対に欠かすことができない人間関係があり得る、ということの好例です。

若者たちのシェアハウスも、拡大家族的近居のひとつの形といえるのではないのでしょうか。戦後の日本人は、何かにつけて「自立独立こそが善である」「他人に迷惑をかけるな」などと主張しがちでしたが、今の若い人たちは「経済的に困っているのだから、(人を)頼って何が悪い」と言う。その対比は本当におもしろい。新たな住みこなしを切り開こうとする若い人たちの邪魔をしないで、ぜひ応援していきたいですね。